

国立国語研究所学術情報リポジトリ

On the Use of "Objective" and "Subjective" Expressions for Food Assessment in Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ザトラウスキー, ポリー, SZATROWSKI, Polly メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000506

食べ物を評価する際に用いられる 「客観的表現」と「主観的表現」について

ポリマー・ザトラウスキー

ミネソタ大学／国立国語研究所 外来研究員 [-2011.08]

要旨

本研究は、食べ物を評価する際に用いられる「客観的表現」と「主観的表現」について考察する。そのために食べ物を評価する語句が、語句のみの場合（調査A）、食べ物を評価する語句が、文脈なしの発話に置かれた場合（調査B）、食べ物を評価する語句が、実際の会話で用いられた場合（調査C）のそれぞれにおいて、その語句／発話が肯定的／否定的な意味を持つかどうかの3種類の調査を行った。資料は試食会のコーパスから取った、20代の女性3人が3つのコースからなる食事を食べながら話している実際の試食会の会話を録音・録画したものである。調査Aでは語句のリスト、調査Bでは（調査Aの語句が含まれている）文脈から切り取った発話のリストをもとに、それぞれの語句や発話が肯定的か否定的かを5段階で被験者に判断してもらった。調査Cでは（調査Bの発話が入っている）試食会のビデオを見せながら、被験者にビデオの参加者が評価していると思う発話に対して、それらが肯定的か否定的かを会話の文字化資料に+、-で記してもらった。その結果、いわゆる客観的な語句であっても、個別の語句もその語句が含まれた文脈なしの発話も肯定的／否定的な意味を持つこと（調査A、B）、それが試食会の会話の場合では一層顕著であること（調査C）が分かった。このように、いわゆる客観的な語句で主観的な好みが表示される。そして試食会の相互作用の中での使用を分析した結果、参加者は食べ物に関する知識と過去の経験との比較に基づいて評価すると同時に自分のアイデンティティを見せ、ほかの人との意見・考えの異同を確認し合い連携し、親疎の人間関係を作ること、食べ物の評価は動的に作り上げられ、時間とともに展開し、変わっていく社会的な活動であることが確認された。「客観的表現」と「主観的表現」は、従来の意味論の研究においては語句中心か文脈なしの文で考察されてきたが、実際の様々な種類の談話の相互作用の中で考察する必要がある。本研究は、食べ物を評価する形容詞等の意味に関する研究、異文化間の理解、食べ物に関する研究にも貢献できるものである*。

キーワード：食べ物、評価、客観的表現、主観的表現、肯定的／否定的

1. はじめに

本研究は、いわゆる「客観的表現(objective expressions)」と「主観的表現(subjective expressions)」は食べ物を評価する際にどのように用いられているのかを考察する。資料は20代の女性3人が3つの異なるコースからなる食事を食べながら話している実際の試食会の会話を録音・録画したものである。分析に際して1) 食べ物に言及したり、評価したりする語句は、語句のみの場合、文脈から取り出した発話に含まれた場合、実際に食べながら話す会話の場合においてどのように

* 国立国語研究所の角田太作名誉教授、お茶の水女子大学の高崎みどり教授、古瀬奈津子教授、香西みどり教授、十文字学園女子大学の星野裕子講師に色々お世話になり、感謝申し上げます。また、試食会の資料収集、文字化資料の作成等は山田さおり氏、原田彩氏に、調査資料作成はお茶の水女子大学大学院研究員の福留奈美氏に、調査データの入力には久山めぐみ氏に、統計の分析はミネソタ大学のD. Andow教授にご協力いただき、感謝いたします。試食会の参加者にも調査の被験者にもお礼申し上げます。本研究は2009～2011年度のミネソタ大学の科学研究費補助金と2012～2013年の博報財団第7回「日本語海外研究者招聘事業」による招聘研究の成果の一部である。

意味が異なるか、2) 会話の相互作用において食べ物の評価はどのように交渉されるのかの2つの観点から考察する。

2. 先行研究

食品科学ではヒトの感覚を用いて食品を評価する官能評価という品質測定方法がある。色や味の感じ方はヒトによってばらつきがあるため官能評価は主観的評価である。ヒトの感覚を用いる主観的評価には分析型と嗜好型があり、前者は識別（「甘い」「薄い」）、後者は好み（「おいしい」）を聞くものである。「これは甘い」も「こちらの方が甘い」も主観的に判断されたものであるが、後者は糖などを測定することで客観的な裏付けがとれる。主観的評価で識別できるときは何らかの客観的評価で差が出るはずだし、そのような評価法があれば主観的評価を客観的評価による数値に置き換えることが可能ということになる¹。

日本語による食べ物の評価に関する言語研究は、日本語の味を表す用語とオノマトベに関する研究がほとんどである。一方、英語による会話においては食べ物の評価を含めての評価に関する研究がある。研究によって何を客観的なものにするか主観的なものにするかは異なっている。

2.1 日本語の味や食感を表す語彙についての研究

西尾（1972: 21）は、主に文章からの例に基づき、形容詞を「感情形容詞」（「嬉しい」、「おいしい」）と「属性形容詞」（「赤い」、「甘い」）とに分類している。「感情形容詞」が「主観的な感覚・感情」を表すのに対して、「属性形容詞」は「客観的な性質・状態」を表すと述べている（西尾 1972: 21）。また、両者にまたがるものもある（「暑い」、「おもしろい」）（西尾 1972: 35）。「感情形容詞」の特徴として、「人間が、形容詞が表している内的な気持ちや態度にあることを外的な態度・言動などに示すことを意味する」「～がる」が付くが、「属性形容詞」には付かない（西尾 1972: 23-24）。また、「感情形容詞」は主語の制限があり、主に感情の主体である人間が主語となり、「話し手自身の主観的な感情・感覚を直接的に表す」「第一人称的形容詞」とでも呼ぶことができる（西尾 1972: 27）。さらに、「おいしい／うまい」は快、「まずい」は不快を表す評価性を持つ（西尾 1972: 192）。「おいしい」は「おいしい」と一語で言った場合は、「話し手の感覚的な快感そのものを表している」が、しかし「うまいよ、このフライ」の例もあることから、「やはり食べ物を主体だと考える方が無理がない」と述べている（西尾 1972: 104-105）。さらに、(1) のように味を感じる人間が主体になれば、「～がる」もとるため、感情形容詞的な面もあると述べている。

(1) A おいしい。

B ぼくもおいしい。

(西尾 1972: 105)

一方、「甘い」、「すっぱい」は「ぼくも甘い／すっぱい」は「普通に成り立」たないし、「すっ

¹ お茶の水女子大学の香西みどり先生からの直話による。

「あまがる」の例は味覚と異なるため²、「感情形容詞的な面はあまりなく、だいたい、飲食物を中心とした、ものを主体とする属性表現の形容詞」にしている（西尾 1972: 105）。「甘い」は評価を表し、おいしい味の意味を表す例が多いが、(2) と (3) のように「評価の点で積極的な特徴をもたない」例もある（西尾 1972: 272-273）。

(2) 二人は、黙って、薬品的に**甘い**、コーヒーを飲んだ。（自由学校 330）

(3) 御節^{おせち}、きんとん、かまぼこ、だてまき、黒豆、どれもこれも**甘い**もの、冷えたものばかりで、閉口した。（文芸 1956 年 1 月 36）

（以上、西尾 1972: 273）

Backhouse (1994: 39) は日本語の味に関する用語を意味論の観点から分析している。資料は、1 人のインフォーマント（Backhouse 氏の妻で日本語母語話者）の答えと二次的な資料（女性雑誌の食べ物に関する討論、日常の飲食物の文化的な諸相に関する人気のある科学本、文化と食べ物に関する学会の予稿集）である。

まずはじめに、味に関する用法を「味を評価する形容詞」(evaluative taste adjectives)（「おいしい」「うまい」「まずい」）と「味を描写する形容詞」(descriptive taste adjectives)（「甘い」等）とに分けている（Backhouse 1994: 37, 178）。インフォーマントとの質疑応答から日本語の味に関する用語の外延的公理 (denotational axiom) と味に関する規範 (taste norms) を抽出し、それに基づいてそれぞれの形容詞の意味とほかの形容詞との意味関係を分析している。外延的公理は典型的な食べ物の味の質を例示するものである。一方、味に関する規範は、ある食べ物が普通に持っている期待される味の質である。

「味を評価する形容詞」(「おいしい」「うまい」「まずい」) の分析には、味に関する用語の範囲を定める (delimitation) ために「X (=ある食べ物) はうまい?」、「X (=ある食べ物) はどう?」という (4) と (5) のような質問応答を行っている。

(4) Q この桃はうまい?

A ええ、すい味があっておいしい。 (Backhouse 1994: 37)

(5) Q そののりはどう?

A 香りがよくておいしい。 (Backhouse 1994: 63)

「味を描写する形容詞」(「甘い」等) を分析するために、(6) のように「X (=ある食べ物) はどんな味がする?」³、(7) と (8) のように「X (=ある食べ物) は Y (味を描写する形容詞)?」

² 森田 (1989: 354-355) も「～がる」に色々な意味があると述べている。「～がる」は「形容詞・形容動詞、希望「たい」の語幹に付いて、三人称の人物および動物がそのように感じたり、様子をしているさま」を表す。また、そのほかに「うれしがる、いやがる」は「しきりにそのように感じる」意味を表し、感覚形容詞は「わざとそのようなふりをする」という演技の意味が表しやすいと言う。

³ 「X (=ある食べ物) はどんな味がする?」は普通の日常会話ではあまり用いられないが、子供との会話と言語を教える時には自然な質問だと述べている (Backhouse 1994: 181)。これに対し筆者 (ザトラウスキー) は普通の日常会話に基づいて分析すべきだと考えている。

という質疑応答を収集した。これは個人的な好き嫌いや味に対する文化的な期待ではなく、その食べ物はそうであるべきかどうか大切に述べている (Backhouse 1994: 17)。

- (6) Q メロンはどんな味がする？
A 甘い。 (Backhouse 1994: 75)
- (7) Q みかんは甘い？
A 甘くはないけど、甘酸っぱい。 (Backhouse 1994: 96)
- (8) Q バナナは甘酸っぱい？
A 甘酸っぱくない。甘い。 (Backhouse 1994: 100)

次に、Backhouse (1994) は、味を評価する形容詞と味を描写する形容詞に主観的な下位分類があるかどうかを3つの証拠によって考察している。味を評価する形容詞には3つとも当てはまるため主観的な下位分類があると述べている。証拠1は西尾 (1972) と同様、(9) のように一人称の主体をとる (directly predicable of a first-person experiencer) ことである。これは、(10) に示すように「赤い」のような色を表す形容詞とは異なると述べている⁴。

- (9) Q このピラフはあまりおいしくないね。
A そう？私は結構おいしいけどね、
- (10) Q このりんごはずいぶん赤いね。
A *そう？私はあんまり赤くないけど。 (以上、Backhouse 1994: 66)

証拠2は、西尾 (1972) と同様、(11) と (12) のように「～がる」が付くことである。

- (11) まずがって少しも食べない。 (西尾 1972: 105; Backhouse 1994: 67)
- (12) Q アップルパイは？
A 子供達がおいしがって全部食べちゃった。 (Backhouse 1994: 67)

証拠3は、主体が一人称の場合には (13) のように、二人称、三人称の場合には (14) のようにある種の副詞⁵ ((13) は「おいしく」、(14) は「おいしそうに」) とともに使うことができることである。

- (13) 大変おいしくいただきました。 (Backhouse 1994: 67)
- (14) おいしそうに食べる。 (Backhouse 1994: 69)

一方、味を描写する形容詞は、質疑応答を利用して3つの語彙システム (lexical system) に分類した上で主観的な下位分類があるかどうか考察している⁶。筆者 (ザトラウスキー) は表1に

⁴* はインフォーマントが容認できない不自然な文を示す。

⁵ Backhouse (1994) の言う「副詞」は日本語文法の副詞とは異なる。

⁶ 味を描写する形容詞が同じ語彙システムに属するかどうかを決める際、以下の (i) から「甘酸っぱい」と「甘い」は同じ、(ii)～(iv) のような応答から「辛い」と「臭みがある」は別の語彙システムに属するという

Backhouse (1994) が分類した 3 つの語彙システムの特徴をまとめた⁷。

表 1 味を描写する形容詞の 3 つの語彙システムの特徴
(Backhouse 1994: 87, 94-95, 134-136, 142, 148)

味 I		味 II	
+	甘い	-	あくっぱい
+	甘酸っぱい	-	あくがある
+	甘辛い		
+	ほろ苦い	味 III	
+	ぴりっと	+	香ばしい
(-)	すっぱい (すっぱがる)	+	香りがいい
(-)	辛い (辛がる)	-	泥臭い
(-)	しょっぱい	-	青臭い
(-)	苦みがある	-	臭みがある
(-)	渋みがある		
-	塩辛い		
-	苦い (苦がる)		
-	渋い (渋がる)		

味 I は、証拠 1 (15) のように一人称の主体をとることができ、また、味 I の一部は、証拠 2 「～がる」をとることができる（表 1 参照⁸）。証拠 3 に関しては (16) に示すように主体が二、三人称の場合の (14) に類似する副詞の用い方があるが、一人称の場合は (13) のような副詞の用い方がないと言う。これによって味を描写する形容詞は、やや主観的であるが、3 つの証拠が全部は当てはまらないため、味を評価する形容詞ほど主観的ではないと述べている。

(15) Q このみかんはすっぱくない？

A 私は甘いけど。 (Backhouse 1994: 94)

(16) すっぱそうに食べる。 (Backhouse 1994: 69)

さらに、Backhouse (1994) は「X (=ある食べ物) っておいしい／うまい？」という質問（例えば (17)～(19)）に対する応答で感情的な値 (affective value) を確認している。

分析方法を用いている (Backhouse 1994: 84-85)。

- (i) Q バナナは甘酸っぱい？
A 甘酸っぱくない。甘い。
- (ii) Q チーズは辛い？
A 辛くない。
- (iii) Q チーズはどんな味がする？
A 臭みがある。 (以上, Backhouse 1994: 84)
- (iv) Q チーズは辛い？
A *辛くない。臭みがある。 (Backhouse 1994: 85)

⁷ 筆者 (ザトラウスキー) は Backhouse (1994: 87, 94-95, 134-136, 142, 148) で書かれた味を描写する 3 つの語彙システムの特徴を表 1 にまとめたが、その際、語彙システムの題名の和訳 (「味 I, 味 II, 味 III」) をし、形容詞をローマ字から日本語の表記へ書き換えた。

⁸ 表 1 の「すっぱがる」、「苦がる」「渋がる」に関しては Backhouse (1994: 94) は Martin (2004 [1975]: 361-365) を参照している。表 1 の +, (-), - は以下で説明する感情的な値を示す。

- (17) Q 桃はおいしい？
A うん、おいしい－甘くておいしい。
- (18) Q 昆布茶はおいしい？
A うん、ちょっとしょっぱいけど、おいしい。 (以上、Backhouse 1994: 135)
- (19) Q 渋柿はおいしい？
A 渋柿はまずいよ－渋いから。 (Backhouse 1994: 136)

(20) a. の応答のみが出現した場合その味を描写する形容詞 (X) は+, (20) b. と c. の応答が出た場合は (-), (20) c. のみの場合は-という結果となっている⁹ (Backhouse 1994: 136)。

- (20) a. X-ておいしい／うまい。
b. Xけどおいしい／うまい。
c. X-てまずい／Xからまずい。 (Backhouse 1994: 136)

Backhouse (1994) の、味を描写する形容詞が感情的な値 (affective value) (肯定的な意味と否定的な意味) を持つことができるという考えは賛成できるが、表 1 に示す形容詞は Backhouse (1994) とは異なり、+, - の両方の意味を持つことができると思われる。Backhouse (1994) は一般的な (generic, general), または普通の (normal) 質問に対して例えば「甘くておいしい」、「しょっぱいけどおいしい」「しょっぱくてまずい」「しょっぱいからまずい」、「塩辛くてまずい」「塩辛いからまずい」しか許されないと述べているが、場面によっては (21)~(23) のような構造も可能だと推察できる。例えば、(21) b. は本来しょっぱい食べ物 (塩辛) について語る場合、(22) a. と (23) a. は、本来あまり甘くない食べ物について語る場合には可能となる¹⁰。

- (21) a. しょっぱくておいしい。
b. 塩辛くておいしい
- (22) a. 甘いけどおいしい。
b. 塩辛いけどおいしい。
- (23) a. 甘くてまずい。
b. 甘いからまずい。

本研究で用いた実際の試食会の資料では、「甘い」は「おいしくない」という意味で用いられることもあるが、Backhouse (1994) の下位分類はそれを反映していないのである¹¹。

⁹「X-て」は「甘くて」のようなテ形の形容詞の略である。

¹⁰ 国立国語研究所の角田太作名誉教授からの直話による。

¹¹ Backhouse (1994: 137) は以下のように述べている。しかし、食生活は変化が激しいし、実際の日常会話では味について常に話されており、その中で味をどう評価するかは動的に交渉され、Backhouse (1994) が言うほど味に関する用語は規範的ではないと思われる。

Let us stress again, however, that our focus here is on the general, or normal, level. As we have seen, the fact that AMAI 'sweet' denotes a basically pleasant taste quality does not prevent sweetness from being an undesirable attribute in specific cases where taste norms are infringed. Neither does it prevent individuals from developing

秋山 (2003) と早川 (2006) は食べ物の評価にオノマトベが用いられると述べている。特に食感を表すのにオノマトベが多く用いられていると言う (秋山 2003)。

2.2 実際の会話の相互作用における食べ物の味や評価に関する研究

Wiggins and Potter (2003) は、個人の好き嫌い (*like, enjoy, love, hate*) を示す主観的評価 (*I(x)* *cheese*) と物の性質 (*good, enjoyable, lovely, (too) strong*) を示す客観的評価 (*The cheese is (x)*) とを区別している。これらの評価は、実際の、イギリス人の家族が食事をしている会話において異なる活動で用いられていることを示している。例えば、主観的評価は、相手の反応を必要とせず、ほめられたことを謙遜する (*downgrade*) ために用いられる。また、食べ物を断る時に用いられた場合には、評価者がなぜそのように評価しているかについての説明が求められる (*hold accountable*)。一方、客観的評価は評価対象を前景化させ (*foreground*)、ほめることを強調したり、説得したりするのに用いられる。心理学の研究では、被験者に食べ物を段階によって評価させるが、その方法論は2つの理由によって問題があると述べている。1つ目は心理学者によって予め決められた個別的な評価をさせるため、被験者自身の個別的な食べ物や食べる経験による理解、方針、修辭的な解釈や意味の交渉を許さないからである。2つ目は、食べることの感覚的体験が食べながら交渉されるにもかかわらず、心理学者は段階による評価を被験者の根本的な味 (*underlying tastes*) や心理状態に一般化し過ぎるからであると述べている。

C. Goodwin (1986) と C. Goodwin and M. Goodwin (1987) は、実際の相互作用における評価を研究している。評価は、「評価形式 (*assessment segment*)」(*beautiful* のように評価を直接表す単語) と強調表現 (*so, really* 等) やイントネーションによる「評価信号 (*assessment signal*)」だけでなく、「評価活動 (*assessment activity*)」の過程の中で作り上げられ、その際「共通の理解 (*congruent understanding*)」を作るために言語・非言語行動が用いられると述べている。「評価活動」とは、「評価表現」を含み、ある参加者が「評価行為」をし、その後それに対するほかの参加者の、その評価と関係ある「行為」をモニターしながら、それに影響を受け、時間とともに自分の評価を変えたりしていくことである。このように評価は、個人の中でのみ存在するのではなく、(24) のように、参加者が互いの言語・非言語行動から次にどのような評価が来るのかを予測し、時間とともに展開する一連の複雑で具体的な行為である (“*intricate, temporally unfolding sequence of embodied action*”) と述べている (C. Goodwin and M. Goodwin 1987: 32)。このように評価という行為は、会話の相互作用の中で非言語行動を含めて動的に作り上げられていくと主張している (C. Goodwin and M. Goodwin 1987: 32, M. Goodwin and C. Goodwin 2000, 2001)。

personal tastes which do not favour sweet substances, or from finding them undesirable on particular occasions. (Backhouse 1994: 137)

しかし、ここでは一般的なレベル、または普通のレベルに焦点があることをもう一度強調しよう。今まで見たように、「甘い」が基本的に快な味の質を意味することは、味の規範が破られる特定の場合には「甘い」が望ましくない特質であることを妨げない。また、甘いものを好まない個人的な好みを個々人が発揮すること、あるいは特別な場合にそれを好ましくないと思うことを妨げない。(日本語訳はザトラウスキーによる)

(24) Dianne: **Jeff** made en asparagus pie¹²

ジェフはアスパラのパイを作ってくれた。

上体を下ろす うなずきと眉の素速い動き (eyebrow flash)

Dianne: it wɜ | s: | so:// | goo:d. |

すごー, すご//ーくおいしかったー。

Clacia: 大好き。 それ。

| I love | | it. |

うなずき うなずき

(C. Goodwin and M. Goodwin 1987: 32)

C. Goodwin (1986), C. Goodwin and M. Goodwin (1987), M. Goodwin and C. Goodwin (2000, 2001) を援用し、ザトラウスキー (2005a) では感情評価の動的な過程、ザトラウスキー (2010b) では、テレビの料理番組でどのように言語・非言語行動が用いられているのかを考察した。ザトラウスキー (2011) は、試食会の方法論を説明し、言語・非言語行動の種類を分析した。

以上のように、従来の研究には、文章例と文法的な判断による意味論の研究や、文脈から切り離れた味に関する用語を含む質疑応答と文法的な判断から主観的下位分類を決める意味論の研究、食べ物の食感等を表すオノマトペの研究が挙げられる。一方、自然な会話に関する研究では、評価は個人の内在的な現象だけではなく、ほかの参加者との相互作用の中で動的になされると主張する研究もある。本研究は意味論の観点からなされた味に関する語句の意味を調査によって確認し、その後その意味は相互作用の中でどのように作り上げられるのかを考察する。

3. 分析

3.1 資料と分析方法

本研究の資料は、3人の参加者からなる13の試食会を録音・録画したコーパスである。試食会は、40分から50分の長さであり、日本、セネガル、アメリカの料理からなる3つのコースを食べながらそれについて話したり、評価したりする会話である。本研究はそのコーパス中の20代の女性3人による試食会 (JPN3) を分析対象とする¹³。

調査は次の方法で行った。まずはじめに、食べ物を評価する語句が、語句のみの場合 (調査A)、食べ物を評価する語句が、文脈なしの発話に置かれた場合 (調査B)、食べ物を評価する語句が、実際の会話で用いられた場合 (調査C) のそれぞれにおいて、その語句／発話が肯定的／否定的な意味を持つかどうかの3種類の調査を行った。次に、調査で得られた答えの多様性 (diversity of response) と調査同士の答えの違いの有意性について統計的な分析を行った。そして、被験者の答えが統計的に有意だった肯定的な評価を表す発話と否定的な評価を表す発話を含む試食会のいくつかの箇所を取り上げて会話分析を行った。

¹² (24) では強調文字は強調、:/ーは母音の伸ばし、//は次の発話との重複を示す。

¹³ JPN3 はコーパス中の日本語による3つ目の試食会を指す。

調査Aでは、19人の被験者に食べ物を評価する語句が肯定的か否定的かを5段階（--，-，0，+，++）で認定してもらった。調査Bでは、同じ19人の被験者に、調査Aの語句が含まれている（試食会から抽出した）個別の発話と同じように肯定的か否定的かを5段階（--，-，0，+，++）で判断してもらった。調査Cでは、21人の被験者に（調査Bの発話が入っている）実際の試食会の文字化資料を配り、そのビデオを3回流しながら、試食会の参加者が評価をしていると思う発話に対して、その評価が肯定的な場合は+、否定的な場合は-で記し、それ以外の発話はそのままとしてもらった。

3.2 調査A, B, Cで得られた答えの多様性

調査A, B, Cで得られた語句と発話のそれぞれの値を比較した。まず、調査AとBが5段階、Cは3段階で答えてもらったため、調査AとBの答えを3段階に変換した。次に文脈と被験者の答えの多様性を考察するために、調査A, B, Cで得られた答えの多様性をシャノンの多様性指数（Shannon's Diversity Index）（H）で計測した。Hは高ければ高いほど答えの多様性が大きいことを示す。

表2 調査A, B, Cで得られた答えの多様性の比較

A>B>C	A>C>B	B>A>C	B>C>A	C>B>A	合計
38 (54%)	5 (7%)	20 (29%)	6 (9%)	1 (1%)	70 (100%)

表2にシャノンの多様性指数で計測した調査A, B, Cの答えの多様性の傾向をまとめた。調査Aは調査Bより答えの61%（54+7），調査Cより答えの90%（54+7+29）が多様性が大きかった。調査Bは調査Cより答えの92%（54+29+9）が多様性が大きかった。つまり、全体を通して調査A（語句のみ）が一番答えの多様性が大きく、調査B（個別の発話）が次に大きく、調査C（自然な会話）が一番答えの多様性が小さかったのである。換言すると、調査Aの被験者は語句の評価が肯定的か否定的かに関しては一番合致せず、その次に調査Bであり、調査Cの被験者は一番合致したということである。この結果はWiggins and Potter（2003）の、段階によって食べ物の評価を調査することに対する批判の裏付けにもなる。調査Aの被験者の答えが一番合致しなかった結果は、文脈から切り離れた個別の語句の意味が1つに定めにくいため、個別の語句を用いて食べ物の段階による評価をするのに問題があるからだと考えられる。

3.3 調査同士の答えの違いについて

評価の意味（肯定的か否定的か）が文脈によって変わるかどうかを考察するため、調査AとB、調査AとC、調査BとC、のそれぞれの答えの平均値を対応t検定で比較した。有意性の検定は調査全体を通してボンフェローニ補正で誤り率を0.05に保って解釈した。

調査同士の答えの違いを対応t検定で比較した結果、調査Aと調査Bの平均値が有意の差が出た語句・発話が一番多かったので、それを表3にまとめた¹⁴。表3の左の欄には（試食会の文

¹⁴ 調査Bと調査C、及び調査Aと調査Cで有意の差が出た場合には表3の右の「答えの平均値」の欄の右

字化資料の) 発話番号, 真中の欄には被験者に調査 B で文脈なしで, 調査 C で会話の中で答えてもらった発話を示している。さらに, 真中の欄の発話に, 調査 A で個別に答えてもらった語句を下線によって記した¹⁵。そして, 右の欄には肯定的か否定的かの答えの平均値が示してあるが, 左には調査 A・調査 B の 5 段階による答えの平均, 右の括弧内には調査 A・調査 B・調査 C の 3 段階による答えの平均を示した。平均値が+の場合はその語句/発話が肯定的な評価, -の場合は否定的な評価と認定されたことを示す。

表3 調査 A (語句) と調査 B (個別の発話) とで有意の差が見られた答え

発話番号	調査 A (下線で示す語句) と調査 B (調査 C) の発話	答えの平均値 A5/B5 (A3/B3/C3)
166h, 168h	// ひじき さあ、結構、あの一、 <u>薄味</u> で味付けしてる↑。	.47/-97 (.22/-75/-38)
169g	なんか、ひじき薄味だけど、	.47/-1.29 (.22/-95/-14)
180g	濃いよね。	-.61/-1.55 (-.51/-95/-95)
193g	なんか、油揚げが@甘い。@	.42/-58 (.71/-79/-1.0) A&C
200g	甘い？	.42/-43 (.71/-51/-14)
213h	(4.1) うどんは、割合やさしい味でございました。 (4.1) うどんは、割合やさしい味でございました。	1.59/.79 (.95/.71/1.0) 1.47/.79 (.83/.71/1.0)
242h	// なんか <u>薄い</u> も ん、 <u>色</u> が。	.18/-1.21 (.18/-89/.76) A&C
243i	(1.0) でもあたしそっちの方が好きなんだけど。	1.89/.24 (1.0/.11/.81)
245g	なんか味// <u>薄い</u> けど 色が濃いみたいの↑。 なんか味// <u>薄い</u> けど 色が濃いみたいの↑。	-.34/-1.21 (-.32/-1.0/-05) B&C -.26/-1.05 (-.23/-87/-05)
598h -599h	し、この <u>白い</u> 一、塊が一、(1.5) よくわからん。	-.12/-1.18 (-.06/-79/-52)
604h	(2.9) これ自体は味あんまりないのかなあ。	† -1.74/-1.03 (-.95/-95/-81)
615g	(1.6) あそっか、この白い塊が甘いのかな。	.71/-.34 (.42/-.32/-.29)
620h	全部甘い。	.71/-1.47 (.42/-89/-76) A&C
634h	え？//この <u>食感</u> @面白くて好きなん// <u>だけ</u> ど。 @ え？//この <u>食感</u> @面白くて好きなん// <u>だけ</u> ど。 @	1.89/.67 (1.0/.31/1.0) 1.89/1.18 (1.0/.84/1.0) B&C
637i	あたしも好きだよなんかこの <u>不思議</u> な食感。	† -.31/1.66 (-.31/95/90) A&C
640g	なんかすぐくアウェイな気分。 フフ なんかすぐくアウェイな気分。 フフ	† -1.59/.36 (-.93/.32/-.67) B&C † -1.43/.36 (-.93/.32/-.67) B&C
646h	あのにごりとかあんまり私得意じゃないんだけど、	-.74/-1.42 (-.74/-89/-62)

193g「なんか、油揚げが@甘い。@」を例に取り説明する。193gの答えの平均値は.42/-58(.71/-79/-1.0)であった¹⁶。これは調査Aと調査Bの5段階による答えの平均がそれぞれ.42と-.58だったのに対し、調査A、調査B、調査Cの3段階による答えの平均はそれぞれ.71、-.79、-1.0だったことを示す。調査Aと調査Bの答えを比較したところ、有意な差が見られた。調査Aで「甘

にそれぞれB&C、A&Cと記してある。

¹⁵ 調査Aで認定してもらった語句は表3の真中の欄の発話に下線を引いて示しているが、そのうちの245gでは「薄い味」と「濃い色」、604hでは「味あんまりない」、634hでは「おもしろい」と「好き」、646hでは「あまり得意じゃない」であった。表3では発話番号順に並べているが、調査Aと調査Bでは、発話番号なしで順番に関係なく無作為に並べて示した。

¹⁶ 資料に用いた文字化記号等に関して稿末の【文字化資料の表記方法】を参照。

い」が肯定的 (.42) と認定されたのに対して、調査 B で「甘い」が含まれた (個別の) 発話では否定的 (-.58) と認定された。また、調査 A と調査 C でも、有意な差が出た。調査 A で「甘い」が肯定的 (.71) と認定されたのに対して、調査 C で「甘い」が含まれた会話の中で認定された発話では否定的 (-1.0) であった。このように調査同士を比較したところ有意の差が見られたのである。文脈によって、「甘い」のような語句の評価が劇的に変化することがある。

調査 A と B の 62 の答えの比較のうち、表 3 に示した 21 が有意であった。その 21 中の 17 は調査 A の認定が調査 B より肯定的であった。(例外は表 3 の右の、答えの平均値の欄に + で記してある。) つまり、被験者は食べ物を評価する個別の語句をその語句が含まれた個別の発話より肯定的に評価したのである。これはこれらの語句を発話で用いることで食べ物の評価が何らかのことで有標、つまり普通ではないため取り上げる必要があることと関連するかもしれない。「甘い」という語句を単独に認定する場合、肯定的な意味があると被験者が答えたのに対して、笑いながら「@甘い。@」と発話する 193g「なんか、油揚げが@甘い。@」、200g「甘い?」、615g「(1.6) あそっか、この白い塊が甘いのかな。」、620h「全部甘い。」という発話の中でその甘みが有標で、普段より甘いということになる。普通の甘味なら取り上げないが、甘味が普通と異なる場合に上げるため、被験者がこれらの発話を否定的だと認定したと考えられる。

3.4 試食会で用いられた発話の肯定的 / 否定的な認定と会話分析

ここでは、調査 C の試食会で用いられた発話が肯定的か否定的かの認定の統計的な分析と相互作用における動的な評価過程の会話分析を行う。調査 C の答えの平均値がゼロと違うかどうかを対応 t 検定を行い、ボンフェローニ補正で誤り率を 0.05 に保って解釈した。被験者の答えの平均値が有意 ($p < .0004$) な場合には、以下の試食会の文字化資料には発話番号と参加者のアルファベットの後に肯定的 / 否定的な認定の平均を + / - で記した。傾向の有意性が $p < .05$ の場合には認定の平均値を括弧内に記す。

試食会の相互作用の中では相づちが頻繁に用いられている。調査 A と調査 B では相づちについては、肯定的か否定的かを被験者に判断してもらわなかったが、調査 C では被験者は試食会の参加者が相づちで評価していると思って相づちも肯定的か否定的かを認定している。全体を通して相づちの平均値は肯定的 / 否定的な度合いがその前の実質的な発話より弱い傾向にあった。また、相づちの前の実質的な発話の肯定的 / 否定的な認定が弱い場合、相づちの肯定的 / 否定的な認定は有意性がなくらい弱くなっていた。この結果は相づちは肯定的 / 否定的な評価をし、前の発話と類似した評価になるが、評価の度合いはそれよりは弱いことを示唆する¹⁷。

資料は、20 代の女性 3 人が日本、セネガル、アメリカの料理からなる 3 つのコースを食べながら食べ物や飲み物について話したり、評価したりする試食会の会話 (JPN3) である。どこの料理か、食べ物や飲み物は何なのかについては前もって教えていない。3 人の女性はカメラから見て左から g, h, i の順で座っている。(25) から (30) は日本料理を食べているコースからの

¹⁷ しかし、イントネーションによって相づちの認定が左右される場合がある。Okada (1996, 2004) 参照。

例である。日本料理のコースは、図1の下から時計回りに示すように、お椀の中のうどん（わかめ、油揚げ）、ひじき（小魚入り）、きなこ棒、のり巻きせんべいからなっている。(31) から (34) はセネガル料理を食べているコースからの例である。セネガル料理のコースは、図2の下から時計回りに示すように、マフェ（mafe）（ジャスミンライスの上に鶏肉、ニンジン、ジャガイモをピーナツバターで煮たものがかかっている料理）、お椀の中のラッハ（laax）（白いトウモロコシの粉、砂糖、レーズンで作るプリンのようなものの上に甘いヨーグルトとミルクがかかったデザート）、バフィラ（bafira）（ハイビスカスのジュース）からなっている。

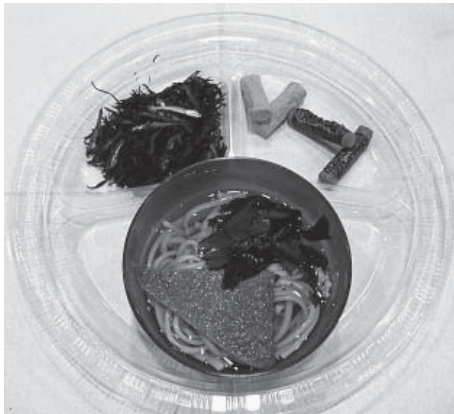


図1 日本料理のコース



図2 セネガル料理のコース

それでは、日本料理を食べるコースの(25)から(30)の例を見ていこう。ひじきについての評価も少しあるが、主にうどんが話題となっているところを取り上げる¹⁸。

(25) JPN3 (ghi=fff < 30) : 日本料理 (6:43-6:58)

ひじき

166h(-) //ひじき||さあ、

167g うーん。

168h(-) 結構、あの一、薄味で味付けしてる↑。

169g なんか、ひじき薄味だけど、

g h

うどん

170g -.90 うどん濃くない？

171i -.76 //うん。||

¹⁸ それぞれの会話例の始めに「JPN3 (ghi=fff < 30) : 日本料理 (6:43-6:58)」のように、会話の名前 (JPN3 は日本語による3つ目の試食会)、参加者 (ghi は参加者を示すアルファベット)、参加者の性と年齢 (ghi=fff < 30 は ghi 三人とも女性で、30歳未満ということを示す)、そこで食べているコース (日本料理)、ビデオの時間 (6:43-6:58) を示す。試食会のコーパスでは参加者を示すアルファベットは小文字 (ghi) が女性、大文字 (GHI) は男性を示す。評価と関係ある実質的な語句を で、話題になっている食べ物を四角で囲んで示す。

172h - .90	//濃い。	(g h i)
173h - 1.0	ちょっとしょっぱいかな。	
174g - .71	うん。	
175i (-)	うん。	
	ひじき	
176g + .95	°ひじきこれぐらいがいいな。°	

(25) では、参加者はひじきについて話している。166h と 168h で h は少しだけ上昇したイントネーションを用いることによってひじきが薄味だということに関してほかの参加者に同意を求めている。それに対して g が 169g で同意し、h と g はひじきが薄味だと同意し合っている¹⁹。その後、170g でうどんが濃いと主張しながら同意を求めている。調査 C では 170g がかなり否定的だと認定されている。続いて、171i の i の相づちによる同意は 170g ほどではないが、否定的と認定されており、172h「//濃い。||」の h の繰り返しによる同意は 170g と同じぐらい否定的と認定された。このように参加者 3 人ともうどんの味が濃いと同意し合っている。次に、173h「ちょっとしょっぱいかな。」で h がうどんを否定的に評価した後、g と i はそれぞれ 174g と 175i の相づちで同意している。次に、176g「°ひじきこれぐらいがいいな。°」で g がひじきに話題を戻し、167g と 169g で曖昧だった評価を肯定的にしている。この発話は「いい」という Backhouse (1994) が言う評価を表す主観的な形容詞を含み、Wiggins and Potter (2003) が言う客観的な評価をする発話であり、かなり肯定的と認定された。しかし、小さな声で発話されたためか h と i はなにも反応しない。

(26) JPN3 (ghi=fff < 30) : 日本料理 (6:58-7:08)

	コンビニの弁当のひじき	
177g (-)	(3.3) コンビニ弁当のひじきってさあ、	
178h	うん。	
179i	うん。	
180g - .95	濃いよね。	
181h - .57	うん。	(g h i)
182i (-)	うん。	
	うどん	(g h) (i)
183i + .95	(1.8) °うどんおいしい。°	

次に、(26) では、g が 177g で 3 人が馴染んでいる「コンビニ弁当のひじき」に言及し、180g「濃いよね。」の否定的な評価に対して h と i の同意を求め、h と i はそれぞれ 181h と 182i の相づち

¹⁹ 文字化資料の右に輪の中に示す参加者のアルファベットを記すことによって会話のその時点で類似した評価をする参加者を示す。場合によっては参加者の連携とも考えられる。

で同意している。コンビニの弁当のひじきを否定的に評価することに対して h と i の同意を得ることで試食会のひじきと比較可能な基準を作り、176g の肯定的な評価を正当化している²⁰。このように現在試食会で食べている食べ物は、過去に食べた類似した食べ物が思い出されるきっかけとなる。その食べ物と比較しながら現在食べている食べ物を評価する基準が作られるのである。

1.8 秒の沈黙の後、i が話題をうどんに戻し、(171i と 175i の相づちによって 170g のうどんが濃いという g の否定的な評価、173h のうどんがしょっぱいという h の否定的な評価それぞれに同意しているにもかかわらず、) 小さな声で 183i 「°うどんおいしい。°」と肯定的な評価をしている。小さな声で言っているのは h と i が同意しないと思っているためであろう。その後 h と i は反応せず、約 26 秒の沈黙の間 3 人が食べ続ける。このように話題にもう触れなくなるのは食い違った意見による摩擦を回避するストラテジーとも考えられる (Jones 1990, 2004)。

(27) JPN3 (ghi=fff < 30) : 日本料理 (7:09-7:55)

日本料理のコース全体

184g (26.3) なんか、味について話し合うんだよねえ。

185h うん。

186i うん。

187g(-) 普段食べてるものだと逆に難しくない。

188i(-) うん。

(5.2) ((g : 油揚げを食べている、h : 椀を置く、i : 椀を置き、ひじきを取っている))

189i(-) なんか自分のうちの味付けと比べてとしか =

190i -.48 @なんとも言えない。@

191h うん//うん。||

油揚げ

192g(-) //挙げるな||ら =

193g -1.0 なんか、油揚げが@甘い。@

194i ~あー食べてないまだ。

(27) では、g が 184g で試食会で何について話すことになっているかに話題を変え、187g で普段食べている食べ物の味について話すのが難しいと言う。189i-190i では「自分のうちの味付け」と比べることしかできないと言ったことに対して 191h で h が同意する。このように 3 人の参加者は食べ物の評価には基準が必要だと述べている。そして、192g-193g では g が自分の家と違う例として油揚げに言及し、笑いながら「@甘い。@」という否定的な評価をする。Backhouse (1994) は「甘い」に肯定的な下位分類があると述べているが、調査 C ではすべての被験者が 193g は否定的な評価を表すと認定している。しかし、それに対して、h は反応せず、i はまだ食べていな

²⁰ Szatrowski (1994) では、「でしょう」によって基盤を作り、その後の発話はそれに基づいて談話が展開されると述べている。180g の「よね」もそれと類似する機能を持っていると考える。

いため、評価をしない。

(28) JPN3 (ghi=fff < 30) : 日本料理 (7:56-8:15)

(4.4) ((g : うどんに箸をつけている、h : ひじきを集めている、i : 椀を持ちながらうどんを食べている))

195g -.48 ~てか油揚げ入ってないうちの。

196h あそうなんだ。

197g→h 入っ//てる? ||

198i (-) //普通||は油揚げはない。

199h 入ってる。

200g→h 甘い?

201h -.86 (1.8) ん、//・こういう味ではない。・||

202i -.81 //・こういうんじゃ||//ない。・||

203g //ふー||ん。

204g 油揚げ入ってるんだ。

205g ~iii²¹ んとこ入ってる? 油揚げ。

206i 気分。

207g 気分?

208i (+) //うん。||

209g //@わかった||チャーハンみたいな感じ//だね、||

210h //フフフ||

211i うん。

212g ~立場的には。@

g h i

(28) では、g は試食会で食べているものと家で食べるものとを比較し続ける。195g で g の家のうどんには油揚げが入っていないと言った後、h と i の家はどうかと確認する。そして、200g で家で食べる油揚げが甘いかどうかと聞いたことに対して、1.8 秒の沈黙の後、h と i が同時にそれぞれ 201h 「//・ こういう味ではない。・||」と 202i 「//・ こういうんじゃ||//ない。・||」と大きな声で答える。試食会で食べている油揚げと家で食べる油揚げとを比べるこの 2 つの発話は調査 C で否定的な評価と認定されている。このことから比較によって否定的に評価していることが示唆されていることが分かる。g は味が甘いため、h と i は味が家と異なるため、試食会の油揚げを否定的に評価している。

家で食べている味は、ほかの食べ物と比較し評価するための基準となる。類似した食べ物の味は家の味と異なる場合、否定的な評価が暗示される。しかし、それによる評価はただの比較にすぎず、評価ではないと言えるため、間接的で摩擦を回避できる。このように家で食べている既知

²¹ iii は i の 3 モーラからなる名前を表している。注 18 で述べたように、女性を示すときには、小文字を用いる。

の味との比較で否定的な評価を示すことができる²²。

(29) JPN3 (ghi=fff < 30) : 日本料理 (8:16-8:55)

うどん

213h + 1.0 (4.1) うどんは、割合やさしい味でございました。

214i + .57 うん。

215g + .62 うん。

日本料理のコース全体

216h(+) ほんとに昨日飲み [h 会だったから、

※ h: 左手(全指を握っている)を少し開きながら机上から胸の高さまで上げ、1つ目の下線部で自分から向こう(カメラ側)へ円を描くことで、飲み会を表す。

217h + 1.0 このメニューは、[h] ありがたい。

※ h: 2つ目の下線部で胸の高さで箸を持っている状態の右手と左指先を、空中の皿の上で向こうから自分へ円を描きながら皿の縁をなぞるように動かすことで、一皿目(日本料理のコース)全体を表す。その後、右手は箸でひじきを取る一方、左手は机上まで下ろし、静止。

218g + .48 {フフ}

219i + .48 {ウフフフ}

220g + .90 @胃にやさしいメニュー//ね。@||

221h + .81 //うん。||

(21.0) ((g: 椀を持ちながらうどんを食べ、汁を飲む、h: ひじきを食べている、i: ひじきを食べ、椀を持ち上げてうどんを食べている))

222h(+) もりもり食べてしまってるなあ。

223i(+) うん。

224g(+) うん。

(29) の 213h で h がうどんを「割合やさしい味」と肯定的な評価をすることに対して、214i と 215g で i と g がやや肯定的に同意している。続いて h は 216h で前の日が飲み会だったためと自分の評価を正当化し、さらに 217h で空中で両手で皿の縁をなぞりながらメニュー全体が「ありがたい」と言うことで肯定的な評価をする。218g と 219i で g と i が笑いながらやや肯定的に理解を示した後、220g 「@胃にやさしいメニュー//ね。@||」で g が肯定的な評価を連体修飾の中で示したことに對して、221h で h が肯定的に同意している。全員が 21 秒間食べた後、222h 「もりもり食べてしまってるなあ。」で肯定的な発話をすることに對して、223i と 224g で i と g が同意している。

²² 稿末の【文字化資料の表記方法】で述べたように、発話中の[]は身ぶりを伴った言葉の始まりと終わりを示す。[g g]の下付のアルファベットによってどの参加者の身ぶりなのかを記す。非言語行動の記述について詳しくはザトラウスキー(2005a, 2005b, 2006, 2010a, 2010b, 2012)と Szatrowski (2010c) 参照。

(30) JPN3 (ghi=fff < 30) : 日本料理 (8:56-9:48)

うどんのだし

225g→h うどんのだし [gって実家なん、なにだった？

※ g : 左手を指 2²³ を伸ばした状態で机上から左 (h の方) へ動かし、下線部で指 2 で h を (胸下の高さで) 指す。その後、左手を自分の腕の左に付け、静止。

226h (2.2) え、な、な_g] にとい、

227g (4.0) 関東醤油っぽいよ。

228h //うん。||

229i //うん。||

230g 実家も醤油っぽい。

231h うん。

232g んー、同じか。

233h [h 分けるとしたら=

※ h : 腹の高さで箸を持っている右手と眼鏡に触れている左手を胸の高さまで動かし、両手 (指先を上に向けている) の平を向かい合わせてくっつける。



図3 234h「関東風」



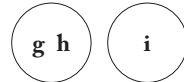
図4 234h「関西風」

234h 関東かん、関東風関西風？

※ h : 下線部で両手 (手の平を内に向け、左全指を伸ばし、指先を前に向けている、右全指で箸を握っている) をそれぞれ胸の前から外側に 4 回 (3 回目 (図 3) は右手をより強く、4 回目 (図 4) は左手をより強く) 動かすことで、関東 (h の右側) と関西 (h の左側) という地域を表す。その後、「関西」の「西」で両脇の前で両手の平を向かい合わせた状態で静止。237i「ふーん」の「ん」から両手を机上まで下ろし、その後静止。

²³ 指 2 は人差し指のことである。

- 235g 東日本西日本みたいな？
- 236h うん。
- 237i ふーん。
- 238g -.62 (1.3)_h] これ、なんか、西日本ばい//感じだ||よね。
- 239h - //うん。||
- 240i うん、
- 241i //確かに。||
- 242h -.76 ~//なんか薄いも||ん、色が。
- 243i +.81 (1.0) でもあたしそっちの方が好きなんだけど。
- 244g ~ (1.3) ん、あたし関東のだな。
- 245g ~なんか味//薄いけど||色が濃いみたいの↑。
- 246i //ふーん。||
- 247i +.95 讃岐うどんとか、//好きだよ。||
- 248g //うーん。||
- 249h(+) うん。
- 250g 讃岐うどん食べたことないな。
- 251g ~違う？やっぱ。
- 252i +1.0 (1.5) コシがある。
- 253g(+) コシ。
- 254i +.52 う//ん。||
- 255h(+) //う||ーん。
- 256g(+) (2.7) レッツゴーきなこ飴。



(30) の 225g で g が話題をうどんのだしに戻し、左手の人差し指で h を指しながら、(28) と同様 h の実家の味について聞く²⁴。226h で h が戸惑い、応答しないところで、227g で g が「関東醤油っばい」と発話し、質問の意味を補う。また、228h と 229i で同時に h と i が同意した後、230g で「実家も醤油っばい。」と言う。(g が自分の家について述べるのは (28) の 195g と類似している。) そして、232g で h の家は同じかと確認する。234h で「関東かん、関東風関西風？」と同時に両手をそれぞれ 4 回外へ動かすことに対して、235g でそれを「東日本」と「西日本」の意味を表すと確認する。238g 「これ、なんか、西日本ばい//感じだ||よね。」で g がやや否定的な評価をし、それに対する 239h と 240i-241i の同意の後、242h 「//なんか薄いも||ん、色が。」で h がさらに否定的な評価をする。一方、i は 240i の相づちと 241i 「//確かに。||」によって「西日本っばい感じだ」ということに対して同意をするが、243i で「でも」という「話をさえぎる機能」を持っている接続表現 (佐久間 2002: 168) によって意見の違いを示した後 (Mori 1996), 「あたしそっ

²⁴ 人を指す指示的な身ぶりについてはザトラウスキー (2006, 2012), Koike (2010) 参照。

ちの方が好きなんだけど。」と肯定的な評価をする。この発話は「けど」で終わり、意見が和らげられているが、それに対して 244g で g が自分の好みは関東であることと、245g で「味//薄いけど||色が濃い」というように関東の味の特徴を述べる。その後は i が 247i 「讃岐うどんとか、//好きだよ。||」で「よ」を用いて自分の好みを強く言う。そして 250g 「讃岐うどん食べたことないな。」の後、また i が 252i で関西のうどんは「コシがある」という特徴を述べ、肯定的に評価する。このように意見が明確に食い違ったまま、256g で g が話題をきなこ飴に移している。

以上のように語句で評価が決まるのではなく、会話のやりとりの中でお互いの意見を確認しながら評価が作り上げられていくのである。g は実家と比べながら実家と異なる味に対して否定的な評価を引きだそうとする。g, h, i は 3 人とも東京出身であるが、うどんに関して i は関西の方を好んでいる。食べ物の好き嫌いから自分が誰であるかが示される。(30) では自分が生まれ育った地域の味しか知らず、その味を好むアイデンティティを持つ人 (g) もいれば、ほかの地域の食べ物も知ってそれも好むアイデンティティを持つ人 (i) もいる。

さらに、参加者は今まで食べた物に関する知識と過去の実験等を話すことで、互いに食べ物の違いを知る機会を得ている。(25), (29), (30) では、表 4 に示す地域差の特徴が話題となっている²⁵。

表 4 参加者の発話から見られるうどんの地域差の特徴

	うどんのだし			うどん
	味	色	味付け	食感
関東 (風) (234h, 244g) 東日本 (235g)	薄い (245g)	濃い (245g)	醤油つばい (227g)	
関西風 (234h) 西日本 (235g, 238g)	濃い (170g, 172h) 割合やさしい味 (213h)	薄い (242h)	しょっぱい (173h)	コシ (がある) (252i, 253g) 讃岐うどん (247i, 250g)

次にセネガル料理を食べるコースの (31) から (34) の例を検討する。主に図 2 に示したラッハのところを取り上げ、考察する。

(31) JPN3 (ghi=fff < 30) : セネガル料理 (18:34-19:07)

ラッハ

575g (1.9) てことはこのヨーグルトつばいの肉じゃないってことかな。

576h -.57 ~ ·@肉ではないでしょこれー。@ ·

※ h : 左手を腕に添え、中を見る

577i //いけいけー。||

578g //さか-魚と||か肉系一、//じゃない [g てことじゃない? そしたらさ、||

※ g : 机上で腕に付けていた左手を脇の高さまで上げる。

²⁵ 表 4 にはあくまでも参加者が話した内容をまとめるだけであり、これらの種類のうどんに関する事実を正確に表しているかどうかは別である。

※ h: 上半身と視線を i に向け、ラッハの腕を左手で胸上の高さで持った状態で、右手のスプーンでラッハを腕の上まで持ち上げ、静止。

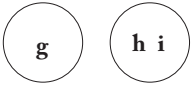
- 599h -.71 (1.5) よくわからん。
- 600g -.48 何これ瓜? なんだろ。
- 601i (-) {フフ}
- 602h -.29 瓜ではない。 ※ h: 首を横に振る。
- 603h (1.2) と思うんだけど。
- 604h -.81 (2.9) これ自体は味あんまりないのかなあ。
- 605i うん。
- 606g レーズン入ってるよ。
- 607h (-) (1.0) あ、うんあのこの、し、白い塊の方さ。
- 608g (-) なんか、パン、なんかレーズンパンを、
- 609g -.57 ヨーグルトに浸した感じっぽくない?
- 610i ん? あーあーあーあーなるほど。
- 611h (4.1) //(?) ね? ||
- 612i +.95 //でもあたしこれ||全然好きだわ。
- 613h (-) (2.1) 甘い。
- 614g -.90 あたしこれちょっと微@妙.@
- 615h (1.6) あそっか、この白い塊が甘いのかな。
- 616g (-) いや、ヨーグルトが甘いんだと思うよ。
- 617i (-) うん。
- 618g -.86 (1.9) ヨーグルトがめちゃうちゃ甘い。
- 619i うん。
- 620h -.76 全部甘い。
- 621g (-) {ンフフフ}
- 622g -.52 んでなんか、パン、//レーズン、とパ||ンみたいなものがつ-とか浸かってる =
- 623h (-) //あ落としてしまった。°||
- ※ h: テーブルにヨーグルトを落とす。
- 624g -.52 ~でもパンじゃないよなこれ。
- 625h うん、パンではないと思う。
- 626h -.48 ~なんだろこの、物体。
- 627g うん。
- 628h -.62 物体エックス。
- 629i {フフ}



(32) では、598h でラッハを「白いー、塊」と言及すること、599h 「よくわからん。」、600g 「な

んだろ。], 604h「味あんまりない」が否定的と認定されるのは, (31)の未知のもの, 味が分からないものの場合と同様である。612i「//でもあたしこれ||全然好きだわ。」と614g「あたしこれちょっと微@妙.@」も, Backhouse (1994)の味を評価する形容詞であり, Wiggins and Potter (2003)の主観の評価である。612iは肯定的な評価であるが, それに2.1秒の沈黙が続き, hもgも反応しない。その後613hの「甘い」も614gの「ちょっと微@妙.@」も否定的である。この時点でラッハの味に対してiが肯定的でgとhは否定的である。その後の616g「いや、ヨーグルトが甘いんだと思うよ。], 618g「(1.9)ヨーグルトがめちゃくちゃ甘い。], 620h「全部甘い。」の「甘い」を含む発話も否定的な評価と認定されている。続いて622g「//レーズン、とパ||んみたいなのがつ-とか浸かってる」, 624g「でもパンじゃないよなこれ。], 626h「なんだろこの、物体。], 628h「物体エックス。」とラッハがはっきりしないもの, 知らないものだとし, やや否定的である。

(33) JPN3 (ghi=fff < 30) : セネガル料理 (20:14-20:36)

- 630g - .90 (2.0) なんかちょっと**ぶにぶに**してるのに =
 631g - 1.0 **ざらざら**しててちょっと**気@持ち悪い**。@
 632h でも、//@ごめんー、@ ||
 633g - .90 //舌触り**気持ち||悪くない?**
 634h + 1.0 え?//この||**食感@面白くて好きなん//**だけど。||@ ※h:左指2でラッハを指す。
 635i //ええ? ||
 636g(-) //んー? | 
 637i + .90 ~あたしも**好き**だよなんかこの**不思//議な食感**。||
 638h + .67 //うんそう**得体||**の**知れない感**が。
 639g - .52 マジで?
 640g - .67 なんかすごく**アウェイな気分**。{フフ}
 641i うん。
 642i ~ (1.7) やっぱ人と食べてるものが違うからだよ//あたしと、||gggg²⁶さんは。{フフ}
 643g(-) //ううん。||

ここまでgとhのラッハに対する否定的な評価が一致しているが, (33)の630g-631g「なんかちょっとぶにぶにしてるのにざらざらしててちょっと気@持ち悪い。@」とオノマトペを用いて²⁷食感に対してかなり否定的な評価を下している発話に対して, 632hでhが謝る。また, 633g「//舌触り気持ち||悪くない?」のgの否定的な評価に同意を要求する発話に対して, 634h「え?//この||食感@面白くて好きなん//だけど。||@」が笑いと「けど」によって和らげられるが, それによってhがgと対立し, かなり肯定的な評価をする。また, iも637i「あたしも好きだよなんかこの不思//議な食感。||」で食感に関して肯定的な評価をしてhに同意し, それと重なって638h

²⁶ gggg はgの4モーラからなる名字を表している。注18で述べたように, 女性を示すときには, 小文字を用いる。

²⁷ 食感をオノマトペによって表すことについては秋山(2003)と早川(2006)参照。

話の場合（調査 B）で肯定的／否定的な意味を持つこと、それが食べ物に対する知識や経験との比較に基づいて評価を行う試食会の会話の場合（調査 C）では一層顕著であることが分かった。このように、客観的な語句で主観的な好みが見られ、食べ物の評価は社会的な活動であることが会話の相互作用の中の使用でも見られた。試食会での評価は動的に作り上げられ、時間とともに展開し、変わっていく。家で食べている味は、ほかのところで食べる既知と未知の味とを比較し、評価するための基準に用いられる。参加者は今まで食べた物に関する知識と過去の経験等を試食会で食べているものと関連づけながら話し、互いの食べ物の評価に影響し合う。また、その知識と過去の経験によって自分はどのような人間なのかというアイデンティティを見せ、連携によってほかの人との意見・考えの異同を確認し合い、親疎の人間関係を作る。食べ物を評価する「客観的表現」と「主観的表現」は従来の意味論の研究において語句中心か文脈なしの文で考察されてきたが、実際の様々な種類の談話の相互作用で考察する必要がある。したがって、本研究は食べ物の評価を表す形容詞等の意味に関する研究、異文化間の理解、食べ物に関する研究にも貢献できるものとする。

【文字化資料の表記方法】

(ザトラウスキー 1993, 2000, 2005a, 2005b, 2006, 2010a, 2010b, 2011, 2012; Szatrowski 2010c)

- 。 下降のイントネーションで文が終了することを示す。
- ? 疑問符ではなく、上昇のイントネーションを示す。
- ↑。 発話、文等が少しだけ上昇するイントネーションで終わることを示す。
- 、 文が続く可能性がある場合のごく短い沈黙を示す。
- 一 長音記号の前の音節が長く伸ばされており、一の数が多いほど、長く発せられたことを示す。
- // || //と||はそれぞれ同時に発話された発話の重なった部分の始まりと終わりを示す。同時に発話された発話両方に示す。
- (0.5) () 中の数字は 10 分の 1 秒単位で表示される沈黙の長さを示す。
- () () 中の発話が記録上不明瞭な発話を示す。
- @ @ @と@の間の発話が笑いながら発話されることを示す。
- ° ° °の間の発話が小さな声で発話されることを示す。
- ・ ・ ・の間の発話が大きな声で発話されることを示す。
- {カタカナ} { } 内のカタカナによって笑い等の音を示す。
- = ポーズがなくても字数のため改行しないといけないことを示す。前方の発話の終わりに示す。
- 途切れた音を示す。(食べ - 食べ物)
- ～ 倒置
- ※ 発話と同時に行われる非言語行動の説明。
- (()) 発話間に行われる食べ物行動等に関する説明。

[g g] 発話中の [] は身ぶりを伴った言葉の始まりと終わりを示す。[g g] の下付のアルファベットによってどの参加者の身ぶりなのかを記す。

下線 実線による下線は身ぶりの中心の動き (stroke) (McNeill 1992) を示す。

相づち的な発話は前の発話の終わりで始めるように右へずらしてある。

参考文献

- 秋山まどか (2003) 「食感を表わすオノマトベについて」『国語研究』66: 12-27.
- Backhouse, A.E. (1994) *The lexical field of taste: A semantic study of Japanese taste terms*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Goodwin, Charles (1986) Between and within: Alternative sequential treatments of continuers and assessments. *Human Studies* 9: 205-217.
- Goodwin, Charles and Marjorie Harness Goodwin (1987) Concurrent operations on talk: Notes on the interactive organization of assessments. *IPRA Papers in Pragmatics* 1(1): 1-54.
- Goodwin, Marjorie Harness and Charles Goodwin (2000) Emotion within situated activity. In: Nancy Budwig, Ina C. Uzgris and James Wertsch (eds.) *Communication: An arena of development*, 33-54. Stamford, CT: Ablex Publishing Corporation.
- Goodwin, Marjorie Harness and Charles Goodwin (2001) Emotion within situated activity. In: Alessandro Duranti (ed.) *Linguistic anthropology: A reader*, 239-257. Oxford: Blackwell Publishing.
- 早川文代 (2006) 『食感のオノマトベ』東京: 三省堂.
- Jones, Kimberly Ann (1990) *Conflict in Japanese conversations*. PhD dissertation, University of Michigan.
- Jones, Kimberly (2004) Managing topics of conversation in Japanese. In: Polly Szatrowski (ed.) (2004), 29-64.
- Koike, Chisato (2010) Ellipsis and action in a Japanese joint storytelling series: Gaze, pointing, and context. In: Polly Szatrowski (ed.) (2010c), 61-111.
- Martin, Samuel E. (2004 [1975]) *A reference grammar of Japanese*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- McNeill, David (1992) *Hand and mind: What gestures reveal about thought*. Chicago: Chicago University Press.
- Mori, Junko (1996) *Negotiating agreement and disagreement in Japanese: Connective expressions and turn construction*. Amsterdam: John Benjamins.
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』東京: 角川書店.
- 西尾寅弥 (1972) 『形容詞の意味用法の記述研究』東京: 秀英出版.
- Okada, Misao (1996) How the length and pitch of *aizuti* 'back channel utterances' and the nature of the speech activity determine preference structure in Japanese. *Berkeley Linguistics Society* 22: 279-289.
- Okada, Misao (2004) Alternating and dual alignments in *nemawasi* 'behind the scenes persuasion' conversations. In: Polly Szatrowski (ed.) (2004), 125-161.
- 佐久間まゆみ (2002) 「接続詞・指示詞と文連鎖」野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則『日本語の文法4: 複文と談話』117-189. 東京: 岩波書店.
- ザトラウスキー, ポリー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』東京: くろしお出版.
- Szatrowski, Polly (1994) Discourse functions of the Japanese epistemic modal *desyoo*. *Berkeley Linguistics Society* 20: 532-546.
- ザトラウスキー, ポリー (2000) 「共同発話における参加者の立場と言語・非言語行動の関連について」『日本語科学』7: 44-69.
- Szatrowski, Polly (ed.) (2004) *Hidden and open conflict in Japanese conversational interaction*. Tokyo: Kurosio Publishers.
- ザトラウスキー, ポリー (2005a) 「談話と文体—感情評価の動的な過程について—」中村明・野村雅昭・佐久間まゆみ・小宮千鶴子 (編) 『表現と文体』468-480. 東京: 明治書院.
- ザトラウスキー, ポリー (2005b) 「情報処理, 相互作用, 談話構造からみた倒置と非言語行動との関係」申田秀也・定延利之・伝康晴 (編) 『活動としての文と発話』159-208. 東京: ひつじ書房.
- ザトラウスキー, ポリー (2006) 「20代の女性の談話における指示的な身ぶりと拍子的な身ぶりの手の形と機能」『表現研究』84: 67-77.
- ザトラウスキー, ポリー (2010a) 「講義の談話の非言語行動」佐久間まゆみ (編) 『講義の表現と理解』

- 187-204. 東京：くろしお出版。
- ザトラウスキー, ポリール (2010b) 「テレビの料理番組の中に見られる言語・非言語行動による評価表現」(表現学会第 47 回全国大会 2010.6.6 お茶の水女子大学).
- Szatrowski, Polly (ed.) (2010c) *Storytelling across Japanese conversational genre*. Amsterdam: John Benjamins.
- ザトラウスキー, ポリール (2011) 「試食会の言語・非言語行動について—30 歳未満の女性グループを中心に」『比較日本語学教育研究センター研究年報』 7: 25-36.
- ザトラウスキー, ポリール (2012) 「日米の実際の談話に見られる人を指す身ぶりと配慮との関係」三宅和子・野田尚史・生越直樹 (編) 『「配慮」はどのように示されるか』 235-256. 東京：ひつじ書房.
- Wiggins, Sally and Jonathan Potter (2003) Attitudes and evaluative practices: Category vs. item and subjective vs. objective constructions in everyday food assessments. *British Journal of Social Psychology* 42: 513-531.

On the Use of “Objective” and “Subjective” Expressions for Food Assessment in Japanese

Polly SZATROWSKI

University of Minnesota / Visiting Researcher, NINJAL [-2011.08]

Abstract

In this paper I investigate “objective” and “subjective” expressions used to assess food. I conducted three surveys to measure positive/negative connotations associated with so-called “objective/subjective” words when they are used individually (Survey A), in isolated utterances (Survey B), and in actual conversations (Survey C) to describe/assess food. The data for this study come from a spontaneous videotaped and audiotaped conversation (from a Taster Lunch corpus) among three Japanese women in their twenties eating a three-course meal. In Survey A and Survey B, informants rated a list of words and isolated utterances (containing the words in Survey A), respectively, indicating whether they had a positive/negative connotation on a five-point scale. In Survey C, informants watched the Taster Lunch video (containing utterances in Survey B), and marked utterances that they thought the speaker used to express positive/negative evaluation on a transcript with a +/- . The results show that “objective” words in isolation (Survey A) and in utterances out of context (Survey B) can have positive/negative connotations, and this tendency was even stronger in the Taster Lunch (Survey C). Analysis of the use of expressions in the interaction at the Taster Lunch showed that participants assessed the food by comparing it to standards they created from their knowledge of and experiences with food, and in doing so displayed their identity, bonded with others based on similarities/differences in their opinions, and adjusted the intimacy of their relationships. In this way food assessment is a social activity that develops dynamically through a process that is temporally unfolding and changing. Although previous research on objective and subjective expressions focused on words in isolation or sentences out of context, this study shows that there is a need to investigate the use of these words in a variety of actual discourse types. The results have relevance for research on the meaning of adjectives, etc. used to assess food, cross-cultural understanding and food science.

Key words: food, assessment/evaluation, objective expressions, subjective expressions, positive/negative